

共同礼拝

2024年9月22日(日) 午前10時30分
午後4時

司式 牧師 姜 徑米
奏楽 大澤葉子

前 奏

招 詞 ヨハネによる福音書 7章37b～38節

讃 詠 546

主の祈り

聖 書

マラキ書3章19～20節 (旧1501)

マタイによる福音書25章1～13節(新49)

祈 禱

使徒信条

讃 美 歌 II 48

説 教 「その時に備えて」

牧師 高橋和人

祈 禱

讃 美 歌 174

献 金

頌 栄 542

祝 禱

後 奏

起立が困難な時は着席のまま礼拝します。
礼拝は前の方から静かに着席しましょう。

9月の祈り

主の選びとみ救いに与り、主と共に歩んだ信仰の先達たちを覚え、残された人々に主の復活によって明らかにされた、真の命の希望と慰めが与えられるように。

伝道が力づけられるように。秋の諸行事が守られるように。夏休みを終えた子どもたちの心と体が守られ力づけられるように。

今日の祈り

礼拝が聖霊によって導かれ、神の栄光が表されるように。心と思いを主にに向けて集中できるように。

集まることができずに祈るもの、配信で礼拝を守るもの、それぞれに主のみ手が伸べられるように。体調を崩している兄弟姉妹が守られるように。

「その時に備えて」 高橋和人

マタイによる福音書25章1～13節

主イエスは終わりの時に備えて、弟子たちにたとえを語られた。御受難の直前であった。主イエスは、御自分がまもなく苦しみと死を負われることを「知っておられた。オリーブ山での説教は終わりの日についてであった。

それは思いがけない時にやってくる。破壊と混乱、惑わすものが現れ苦難と忍耐の時となる。しかし、その時、福音が宣べ伝えられ、人の子が来られる。弟子たちにはいつ来るか分からないその時に備えるように教えられる。

今日のたとえば、終わりの時の生き方を教える。一変して穏やかな情景だ。おとめたちが登場する。花婿を迎える場面だ。花婿は友人たちの家を周り、

いつ到着するか分からない。おとめたちは到着をともし火で待ち受け、案内するのが役割。

10人のおとめたち、教会の姿だ。おとめは期待と喜びに満ちている。到着が遅くなり眠り込みその間にともし火の油が尽きてしまう。ほほ笑ましい。さて花婿は真夜中に到着する。この到着がおとめを賢いものと愚かなものに分けてしまう。

一方は予備の油を用意しており、もう一方は用意がなかった。油は分けてもらえるほどはなく、そのために出迎えることができず、愚かなおとめたちは祝宴に入れられなかった。

これは終末への備えを語る。主は終末を恐れによってではなく、花婿の到来の喜びとして語る。予備の油を持っているのはわずかな違いである。それは日頃ともし火を使っていることにある。

この賢さは岩の上に建物を立て(7:24)、時間通りに食事を用意させる(24:45)ものだ。着実な、日頃のことになる。この賢さは、地味な賢さだ、目に見えるものではない。よく考えられ、忍耐強い。主人に仕え、花婿を待つ希望に支えられている。

終わりの日の備えは、主の日に向かうあり方にある。教会は主の日のものとして礼拝を守ってきた。いつ来るか分からないその時を先取りして、その恵みを知ることのできる時になっている。

主が御自分の死を前にして語られている。それは自分たちの終わりの時の備えになる。絶望の暗闇が待っているのではない。信仰者は目を覚まして、小さな明かりをともし、出迎える備えを持っている。

礼拝に生き、祈りと礼拝の心をもっている。御言葉こそ、ともしびの油である。